

発行：下阪本学区自治連合会 ・ 下阪本学区まちづくり協議会 下阪本市民センター
 発行者：連合会会長 真嶋龍道 ・ まち協会会長 三田光夫 下阪本3丁目14番30号 077-578-0017

下阪本小学校学校運営協議会が教育委員会に意見書を提出

下阪本学区は予想をはるかに超える勢いで開発が進み、毎年200戸以上の新築住宅が誕生しています。その影響で児童数が急増し、数年前より普通教室が不足している状況であります。教育総務課と検討を重ね、多目的教室や図工室を普通教室に転用して対応されていますが、今年度は更に2クラス増でコンピューター室や相談室も普通教室に転用されています。しかしながら、次年度以降は普通教室に転用できる特別教室もなく、普通教室が物理上足りない状況に陥ってしまいます。しかもこの状態が令和9年まで続くと言われ、お手上げの状況であります。これらの現状を放置すれば、子どもたちの健やかな成長と安心で安全な学校生活が脅かされることは確実であります。しかしながら、下小の子どもたちはこのような環境にもめげず、どの子も目を輝かせて、勉学にスポーツに励んでくれています。私たちにとって、それが救いであります。

昨年度、下阪本小学校運営協議会（地域と学校が一緒になって子どもたちの教育を担っていく制度）では、上記の状況を重く鑑み、今後の方策について協議いたしました。「現在の教育環境をこれ以上放置することができない」と判断いたし、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第47条の5第6項に基づき、教育委員会に『意見書』を提出しました。その骨子は、「増築による普通教室の確保に努め、児童の学習環境の維持や向上に善処願います」、「昇降口等、混み合う恐れのある共同スペースの十分な確保をお願いします」等であります。引き続き、運営委員会では地域・家庭・学校と連携しながら、解決の糸口が見いだせるまで関わっていきたく考えています。



6年生を送る週間の様子

去る3月17日に卒業式が厳かに挙行され、139名の卒業生1人ひとりが感謝と新たな決意を持って巣立っていきました。

それに先だって2月27日から3月3日にかけて、「卒業生を送る週間」が実施されました。「コロナ禍の影響で、今年も一堂に会して「6年生を送る会」を実施できませんでしたが、各学年とも工夫を凝らし、6年生への感謝の気持ちをしっかり伝えることができました」と、校長先生がおっしゃっていました。1・2年生は、手作りでのこもった「バッチ」や「メダル」を6年生にプレゼント。3年生以上は各学年で感謝の気持ちを動画撮影し、6年生にプレゼントしました。



「大津こころのきずな作文」最優秀

下阪本小学校 横山心海

心と心

私はきずなと聞いて糸を思いうかべました。その人それぞれだと思えます。だれとつながっているか家族友達…どのようにつながっているか強く軽く…様々です。そしてつなぎ方も様々だと思えます。例えば、たった数分間でえい遠のきずなができたり長い年月をかけて生まれるきずなもあると思えます。だけどきずなを結ぶのはかんたんではなくて相手を思い自分を相手も思ってくれる、そういう事だと思えます。逆にきずなをきるのはかんたんです。たった一言で相手はきずつきなやんでしまうかもしれません。そのような事が起きないために、自分が発する言葉で相手を無意識にきずつけてしまうかもしれない…というのを、発言する前にのどで止める事でいやな思いをしてしまう人をへらせたらいいなと思えます。このようにきずなは心と心を結ぶ糸、かけ橋だと思えます。それを一つでもふやし一つでもえい遠につながっていればいいなと思えます。

「おこぼ（御講法）さん」の由来 酒井神社・両社神社歴史(その2)

下阪本の街は、琵琶湖畔の北國街道（西近江路）に沿う細長い地域で、延暦寺そして日吉大社の門前町として繁栄、その以前から幾多の言い伝えが遺されています。街中には多くの社や祠（ほこら）があり地域の人々の手で守り伝えられ、神社の祭りも様々な形態で傳承されていますが、今回は「御講法（おこぼ）さん」について触れてみます。

元禄16年(1703)「下坂本寺社并古跡改帳」（叡山文庫蔵）によると、南両社（両社神社）の記事に「毎歳正月八日氏餅を明神に献じ、五穀成就を祈る」とあります。



これが「おこぼまつり（おこぼさん）」で、酒井神社も宝暦5年(1755)の「御膳定日」に「正月八日 嚴重之御膳 御神酒并御菓子」と記載されています。北両社(酒井神社)についても同様、二社に共通する伝統行事として長らく伝えられてきました。

文政9年(1826)の御講法神事(両社神社)の記載によりますと、慶長元年(1596)に再興され正月8日に十二の餅が松竹梅とともに献上されます。それは瀬田の唐橋の龍神が参詣にくることに由来しているそうです。この時点では御講法人形の記事は見えませんが、伝説によると毎年1月7日の夜、7歳の男の子のいる家に白羽の矢が立ち、瀬田の唐橋に住まう龍神が両社川（現在は暗渠）をさか上って人身御供を取りにきたそうです。よって、この日だけは両社川河口の港に出入りする船は幸神社の御旅所の浜に停泊場所を移動し、龍神が来るために河口をあけたそうです。また、この夜にはオヨージ（便所）に行くと「カイナデ」という妖怪が尻をなでるといって気味悪かったことや、ジロスケさんという人がこの龍神を便所の窓から見たために失明したなどの傳承もあります。その後、人の身代わりとして手製のわらじ人形や御餅（オダイモク）が供えられるようになったようです。それらの「オダイモク」は人身御供の代わりであり、この日だけは人々が夜間出歩くことまで禁じていたようです。



現在の祭りの主役ともいえる「オダイモク(人形)」ですが、酒井神社の「おこぼまつり」で北酒井町が供える相撲人形の納箱には延享4年(1747)と銘が墨書され、18世紀中期には「御講法人形」が酒井神社に存在していたようです。両社神社の御講法人形が現存した年代が確認できる人形は安政5年(1858)であり、それ以前では十二の餅と松竹梅を奉納するスタイルが長く続いていたと考えられます。このようなことから御講法人形としての奉納は、酒井神社・両社神社の双方では時間差がありながらも、今日まで地域文化伝統行事の一つとして伝えられています。なお、この行事は昭和40年に『大津市民族文化』に指定されています。

「百聞は一見に如かず」是非とも来年正月には自分の目で触れられ、下阪本の歴史探訪の一助となりますことを願っています。